



○ 連携

今、日本全国の公立小中学校を中心に、CS（コミュニティ・スクール）制度が導入されつつあります。県教育委員会が主導して市町教育委員会から学校が指定を受けて活動を開始するというような流れです。別名「学校運営協議会」とも表現されます。山口県は中でもすべての小中学校がCSとなっており、現在の指定校達成率は100%です。数年前、まだ100%になっていないころ、県教委から積極的に指定校となっていただきたいと盛んに各校に奨励されていました。私個人としては「他県と達成率で競争しなくてもいいでしょう。」と内心想っていました。ただ、全国規模の説明会に参加して研修をしたことがありますので、その制度のよさ・大切さ・教育効果などについてはしっかり理解していたつもりです。

CSとはどういうものなのかということですが、ごくごく簡単に説明しますと次のようになります。「子どもたちの教育は学校だけが担うのではなく、保護者・地域の皆様とともに連携して行うものです。ひいては学校を中心とした地域の活性化にも役立ちます。」というところだと思います。本校がある光市はその山口県の中でも先進的にこの制度を導入し、現在も成果を挙げているまちです。スクール・コミュニティという表現での活動もあります。私は他市の小中学校（3校くらい）で転勤のたびCSの立ち上げなどにかかわってきました。その経験から確信したことがあります。子どもたちの学力向上・健全育成にとって最も大切なのは「連携」であるということです。

学校教育（園保育）での連携と表現したとき、誰と誰の連携を思い浮かべられるでしょうか？実はいろいろあります。ざっと挙げてみます。「教職員」は「保育士」とも読み替えてみてください。



子どもと教職員、教職員と保護者、教職員と地域の方々、教職員同士
保護者同士、地域の方々同士、子ども同士、保護者と地域の方々
父と母、両親と祖父母、親戚同士、兄弟姉妹 … まだまだありそうです。

決めつけてはいけませんが、新興住宅地のような、保護者同士・保護者と地域の方々とのつながりがまだあまりできていないところでは、学校運営が難しくなることが多いように思います。お互いが知り合いになっていくにつれ、学校も落ち着いていくということをよく聞いたものです。

私は先生と子どもが“対決”するような場面もときどき経験してきましたが、それを解決に向かわせるよい方法はやはり「連携」でした。お互いの思いを聴き、共有し、共同歩調で前向きに取り組んでいくとじわじわとよい方に向かっていくことを実感してきました。

話が少し変わりますが、“先生”と呼ばれる職業（教諭も保育士も）は「常に他者から見られて（観察されて）いる」ということを自覚しなければなりません。まず毎日、目の前の子どもたちに見られています。そこにはいらっしやなくても子どもの保護者は「担任の先生はどんな授業をしているのだろう。」と思われています。そして地域の方々は「あそこの学校はどんな教育活動をしているのだろう。」と思っています。そんな状況の中で自信をもって教育を進めていくためには、常に自分の資質を高めていく教材研究などの研修と様々な人々との「連携」が欠かせません。

今回は来週から幼稚園の教育実習を始める2年生を中心に、学生たちに伝えたいことを記述してみました。短い期間では深く広い連携はできないと思いますが、意識はしてほしいと思っています。

追記： 「教職員と子ども」「子どもと教職員」

↑ ちょっとした違いを感じませんか？ このことはいずれまた。